将来の発掘調査に備え、窯跡の分布調査・窯跡周辺の地形測量を実施しました。また相互研鑽を目的とした研究員交流も行なっています。

本年度の大きな事業は、これまで試掘調査や踏査で発見されている唐三彩を一冊の図録にまとめることと最近新しく見つかった唐三彩の窯跡の試掘、そして鞏義唐三彩に関するこれまでの研究成果の公開です。10月の末には平城・藤原両調査部のメンバーが中心となり、図録作成のための遺物観察と撮影に出かけました。中国版図録は本年度末に、日本版は2002年度に出版します。

11月の後半には、中国から孫新民所長他4名の研究者をお招きし、22日には、孫所長と陳彦堂副研究員に講演をお願いしました。一般の方々にも聞いて頂く予定でしたが、来日の確定が遅かったため、やむなく近在の研究者約30名にお集まり頂き実施しました。孫所長には鞏義唐三彩の研究成果を、陳氏には唐三彩が生まれる前提となった漢代多彩陶器に関する最新の研究成果をお話し頂きました。

（埋蔵文化財センター）

研究会の開催

第1回　瓦・磚の製作実験についての研究会

平城宮大極殿・大極殿院の瓦に関する研究会のうち、瓦・磚の製作実験について、第1回研究会を11月12日に奈良文化財研究所の小講堂でおこないました。当日は、研究所の内外から22名の方が参加しました。

討論の内容は大きく4つに分け、1）製作実験の目的・意義、2）生瓦を作るまでの技術的復元のあり方、3）窯の構築法、4）今後のスケジュールの順で話し合いがおこなわれました。

第一の製作実験をおこなう必要性については圧倒的に賛成意見が多かったのですが、瓦製作の実験的な試みと、実際に大極殿で使う使わないという問題とは、一応別立てにして検討すべきであるという意見でまとまりました。

第二の生瓦を作るまでの製作技法上の問題ですが、粘土の選択及び粘土自体の分析、粘土の練り方、桶状造瓦器具の製作法、麻布の織り方、布袋製作法、縄叩き原体の復元などが話し合われました。

第三の窯の構築法については、事務局（考古第三調査室）側から、中山瓦窯の最古の窯は階段式登窯であるので、同一形態の2基を、一方は日乾しレンガで作り、他方は硬化剤を入れて固め、その後くりぬくという案を提示しました。これに対し、藤原宮の時代の瓦は須恵質で、平城宮になると焼きがあまい（大極殿の瓦も同じ）という巨視的な見方からすると、階段式登窯ではなく、平窯的な登窯にした方が良いのではないかという意見が出されました。討論の結果、最終的に階段式登窯1基、平窯的な登窯1基を作ることで意見がまとまりました。

第四の今後のスケジュールについては、まだ未定の部分が多いので十分な討論ができなかったのですが、さしあたりこの第1回の研究会をふまえて、考古第三調査室が「瓦・磚製作実験の計画書」を作り、来年度からの具体的な手順・費用を示すことを約束して会を終えました。この会に参加していただいた多くの方々・関係者に厚く御礼申し上げます。

（平城宮跡発掘調査部）

木簡学会第23回研究集会

木簡学会は、木簡に関する情報の蒐集・整理、木簡そのものについての研究・保存、その成果の普及と史料としての活用を目的とするユニークな学会です。奈文研が1975年から3回にわたって開催した木簡研究集会を母体として1978年に設立されました。

12月1日（土）・2日（日）の両日、今年で第23回を数える恒例の研究集会が、全国から160名に及ぶ日本古代史・考古学・東洋史・国語学などさまざまな分野の研究者の参加を得て、奈文研平城宮跡資料館講堂で開かれました。

「墨書土器と木簡」（高島英之氏）・「都城出土漆紙文書の来歴」（古尾谷知浩氏）の2本の研究報告、「長岡京右京六条二坊の調査と出土木簡」（中

木簡学会研究集会の討論風景の一コマ

島皆夫氏）・「元岡・桑原遺跡群の調査と出土木簡」（吉留秀敏氏・坂上康俊氏）の２件の木簡出土事例報告の他、71に上る遺跡の古代から近代までの2001年新出土木簡情報も報告されました。

木簡の出土は全国で20万点を越えました。その研究において果たす奈文研と木簡学会の役割は、今後ますます大きくなることでしょう。

（平城宮跡発掘調査部）

平城宮跡第一次大極殿正殿復元工事

「平城宮跡第一次大極殿正殿復元工事」が、文部科学省文教施設部から発注されました。この工事は平城遷都1300年に当たる2010年の完成を目指して進めているものです。

奈文研はこの事業に協力しております。

（平城宮跡発掘調査部）

第一次大極殿正殿復元予定地

刊行物

『奈良文化財研究所紀要2001』の刊行

独立行政法人としての再出発にともない、毎年刊行してきた『奈良国立文化財研究所年報』も、体裁を一新することになりました。『奈良文化財研究所紀要』として新たなスタートを切ったその最初の号が、刊行の運びとなっています。

従来の３分冊構成を改めて一書にまとめ、１年間の調査と研究の成果を、よりわかりやすくご覧いただけるように努めました。内容はⅠ～Ⅲの３部からなり、Ⅰが研究報告、Ⅱは飛鳥藤原宮跡発掘調査部、Ⅲは平城宮跡発掘調査部の発掘概要報告です。

表紙は比較的シンプルなデザインとし、東洋文明から生まれた明朝体と、西洋文明に源流をもつゴシック体を組み合わせました。また、イメージとして発掘区を示す四角形と、研究をあらわす円形を配したほか、下方には若草山を表現しています。

紀要の表紙

『平城宮発掘調査出土木簡概報（36）』の刊行

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、発掘調査で出土した主な木簡の速報として『平城宮発掘調査出土木簡概報』を編集してきています。先頃その36号を発行しました。昨年の第315・316次調査出土の主要な木簡を中心に、62点について釈文・法量・型式番号といった基礎的なデータを掲載しています。収録木簡には、平城宮跡資料館の発掘速報展で話題となり、新聞報道もされた「訛り」を反映したかとも思われる「難波津の歌」の木簡などがあります。その他、昨年発行の35号からの継続で、『平城宮木簡一』の釈文の補訂を、木簡番号101～200について収録しました。また、本号から、巻頭の写真の大幅増や、巻頭図版での赤外線デジタル画像の掲載、概報毎の木簡通し番号の付与など、より一層の利用の便宜を図っています。積極的な利用が期待されます。

木簡概報の巻頭写真より

（平城宮跡発掘調査部）

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK